

くやしい負け

二年 進藤 智（平成五年度）

九月二十五日、卓球の地区新人戦が行なわれた。その日の朝、会場に入ったぼくに、ムンムンと熱気が伝わってきた。ぼくたち一、二年は、この大会に向けて、夏休みごろからがんばってきた。週に一度か二度の夜間練習にもたえて、やってきた。今日こそいままでの練習の成果を十分に発揮して、絶対勝ち抜くぞとぼくは思った。

飛鳥中は、開会式の前に卓球台を出す当番にあたっていたので出しに行った。台を出していると少し緊張してきた。台が出しおわり、ラケットを取りにいき練習していると次々と強そうな人たちとすれちがった。ぼくも早く名前や顔が売れればいいなと思った。

はじめは、団体戦だ。ぼくたちは、「一回戦はらく（楽）だけども、問題は二回戦だの。」とか、「なんとかが二回戦も勝ちでの。」などと話していた。

そして、練習も終わり開会式が始まった。強そうな顔がずらつとならんだ。けれどもぼくは、誰とあたってでも絶対負けないぞと思った。選手宣誓などを聞いているうちにまた緊張してきた。少し長い開会式も終わった。

団体戦一回戦は、酒田五中だった。ぼくと讃岐友美君は、ダブルスだ。ぼくたちは夜間練習の時、コーチの魚住さんからしごかれてきて、けっこう自信がついていた。相手のダブルスは、前の大会でもダブルスで戦った時があった。その時は、おしいところまでいって負けてしまったので、今度は絶対勝つぞと思った。そうしてる間に審判の人が「二番手、一番手。」と呼んでいた。ぼくは、三番手なので友美君といっしょに前に出てチョコンと礼をした。相手は、あまりやる気がなさそうだったので勝てるなという予感がした。一番手は小関英之君、二番手は本間達君だった。英之君は、なかなか強いので勝てると思ったのでぼくは達君の応援をした。そして、予想どおり英之君は勝ったが、達君は負けてしまった。団体戦は、先に三勝した方が勝ちなので、ぼくたちダブルスが勝っておかないと苦しいなと思った。

そして、いよいよぼくたちダブルスの番だ。一本目のサーブを出すまで少し緊張していたけど、一本目が入ったとたんに、緊張の糸が切れたような気がした。そして、ぼくたちの攻撃が次々と決まり点差がひろがった。そして一セット、二セットともに取り、二勝一敗の王手とした。けれども四番手が負けてしまったので二勝二敗となってしまった。これは、五番手の本間章宏君に勝ってもらわねばと思った。そして、章宏君の攻撃はよく決まり勝った。この結果三勝二敗で二回戦へ進出した。ぼくは、とてもうれしかった。二回戦はもつ

とがんばるぞと思った。

休む暇もなく、二回戦の酒田四中戦が始まった。みんなは、「勝だいつがな。」などと言っていたが、ぼくは相手が誰でもあろうと絶対勝つぞと思った。けれども一番手、二番手と負けてしまい、ぼくたちが負ければもう終わりというところまでいってしまった。ぼくは、みんなが負けてもダブルスだけは勝つぞと思っていた。また、今までの練習の成果を発揮して、悔いの残らないように戦うぞとも思った。そして、一セット目は順調に勝てた。けれども二セット目は、せりながら負けてしまった。ぼくは、三セット目は必ず勝つぞ。一年生相手に負けてたまるかと思った。けれども、三セット目はあっけなく負けてしまった。ぼくは、次に戦う時は今日の借りを必ず返すぞと思った。また、個人戦では団体戦の分もがんばるぞと思った。

少し休んだが、なかなか個人戦の呼び出しがかからないので偵察に行くことにした。ぼくと戦う人は、酒田三中の人だった。三中はその時ちようど、団体戦をしていたので相手の人が見つかった。けっこう強そうな人だった。

昼食を食べて、少したつてからやっと呼び出しがかかった。まず相手の人と練習をした。やはり強かった。そして、試合が始まった。一セット目は、あっけなくとられてしまった。ぼくは、次をおとすと終わりなので何が何でも勝つぞと思った。二セット目は、せりながら二十対十八ぐらいでなんとか、

勝つことができた。次もこの調子で勝つぞと思った。三セット目は、二人とも一步もゆずらず、相手がミスれば自分もミスるし、自分が入れると相手も入るといふ展開だった。けれども相手のサーブがとれず結局二十一対十六ぐらいで負けてしまった。完敗という気がしなかつたのでとてもくやしかった。これからは、この大会の負けを思い出しながら今よりも練習して、次の大会につなげたいと思う。次に戦う時は、誰からも負けないうにがんばりたい。